

## 2016年6月 熊本の被災状況を視察しました

4月に発生した熊本地震の状況を視察する為に、有馬代表理事と事務局で現地に行ってきました。

益城町にある熊本空港も、被災施設となっています。

空港職員の方も被災者のはずですが、復興のために空港機能を維持しようと、懸命の努力をされているのが伝わります。



熊本市内に本社のある新産住拓株式会社さんに話を聞く事が出来ました。

県内累計供給戸数は5000戸で、うち益城町には100戸程度あるそうですが、いずれも倒壊や瓦の落下は無かったそうです！

しかし、地盤が動いたため傾斜が6/1000以上となって、

全壊判定をうけたものが10数件あると話されました。

実際に現場を案内して頂きました。



益城町の幹線道路から住宅街に入ると、被害の大きさを目の当たりにします。

案内頂いたのは新産住拓さんが12年前に建築した住宅です。

周辺の被害に較べると、一見無傷のようにも見える状態でしたが、玄関には「危険」の赤紙。

地盤が動いて8/1000の傾斜が発生したそうです。

倒壊を免れたため、住人の方は無事に避難することが出来ました。

それこそが、住宅に求められる事柄ではないでしょうか。

地震後、この建物に直交して地割れが現れました(矢印)

その激しい振動に建物が耐えられたのは、

ベタ基礎を強化(立ち上がり幅150ミリ、底盤290ミリ)

したからではないかと話されました。

実際、建物が基礎ごと左右に動いた跡が、

地面に残っていました。



益城町を阿蘇方面に行くと、シートを被った青い屋根ばかり目立つようになります。

そうした中、屋根にほぼ損傷を受けていない

集落を発見しました。

何故こうも違うのか？

大きな屋根の家のお母さんに聞いてみました。

「この集落は、宮崎さんが屋根やったから大丈夫だあ」

明快な回答が返ってきました。

地域に信頼できる職人さんが居る。

値段が少々高いかも知れない。

プライドが高い分、無愛想かもしれない。

しかし、住人の命を守り、生活を支える人が

身近に居る安心感、それが「大丈夫だ」の

下地になっている。



復興の第一歩となる木造仮設住宅建設にあたり、一般社団法人日本建築士会連合会と連携して、熊本県に地域の建築事業者を紹介させていただきました。



国土交通省の地域型住宅グリーン化事業に参加している事業者が主体です。

集会所の中は、地元のスギが表して使われ、イグサの香りと和風デザインで落ち着く空間です。